

2018年1月23日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 嶋 大樹
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 体験の回避に関わる行動的プロセスの新たな測定法の開発
論文題目（英文） Development of a new measurement method for behavioral processes related to experiential avoidance

公開審査会

実施年月日・時間 2017年12月1日・11:00-12:00
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第一会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	熊野 宏昭	博士（医学）	東京大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・教授	嶋田 洋徳	博士（人間科学）	早稲田大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・准教授	大月 友	博士（臨床心理学）	広島国際大学	臨床心理学
副査	同志社大学・教授	武藤 崇	博士（心身障害学）	筑波大学	臨床心理学

論文審査委員会は、嶋大樹氏による博士学位論文「体験の回避に関わる行動的プロセスの新たな測定法の開発」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 **コメント**：中間報告会で指摘された事項、特に、研究全体の論理的展開、それに基づく結果と考察も丁寧に説明されていた。プレゼンテーションも概ね明瞭であった。

1.2 **質問**：研究1と研究2において、体験の回避を測定するために使われてきたAAQ-IIなど従来の尺度と、今回作成した尺度とはどこが違うのか。

回答：AAQ-IIは、体験の回避だけでなく、心理的柔軟性を測っているとされている。今回は、体験の回避に限定して、それに関わる複数の特徴が測定できるようにした。

1.3 **質問**：研究1と研究2において、学生と社会人のサンプルを用意しているが、母集団の差異としてどういうことを仮定したのか。

回答：臨床群と健常者は、得点の分布が違おうだろうと思っていた。社会人と学生に対しては、明確な差異を想定していなかった。

1.4 質問：研究3と研究4において、Computerized Ecological Momentary Assessment (cEMA) で用いられるEvent-basedとTime-based 2つの方法で負担の違いはないのか。

回答：データを見直すことで、負担感の違いについて考察することはできる。

1.5 質問：質問紙でも文脈を考慮した場合は、cEMAと同じ結果が得られるのか。

回答：cEMAでは、文脈を考慮できるという点以外に、行動の変化を見ることができる。

1.6 質問：cEMAで測定に従事することが、治療的な意義を持つ誤差になるのではないか。

回答：報告行動を増やすことは治療的になるので、限界として記述する必要がある。

1.7 質問：研究5において、どういう状態が治療的に奏功しているのか分かりにくい。

回答：介入後、体験の回避の累積グラフの傾きが小さくなればよいと考えている。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1 研究1と研究2において、従来の尺度と今回開発した尺度はそれぞれ何を測っているのか、今回の尺度の有用性を過去の研究との関連から主張すること。

2.1.2 研究1と研究2において、いくつかのサンプルで調査を行っているが、母集団の差異としてどういうことを仮定して実施したのかを加筆すること。

2.1.3 研究3と研究4において、Event-basedとTime-basedの2種類の回答の質の違いについて、被験者の負担感の違い、Time-basedでは回答タイミングが不適切になる問題、どちらが臨床的に望ましいのかなどの考察を加筆すること。

2.1.4 研究3から研究5において、今回開発した日常生活下の随伴性に基づく体験の回避をcEMAで測定する方法と、文脈を考慮した質問紙に繰り返し答えてもらうことは何が違うのかを、理論的な面と今回の研究結果に基づく面からより明示的に説明すること。

2.1.5 研究3から研究5において、測定に従事することが治療的に働いてしまうことの有無や是非について、どう考えるのかを加筆にすること。

2.1.6 研究5において、ターゲット行動と体験の回避の指標がどう変化することが望ましいのかという理論的前提を加筆するとともに、経過を示すグラフで累積度数を使う有用性についても加筆すること。

2.1.7 研究5において、参加者の感想のデータを、ポジティブなもの、ネガティブなものを含め積極的にまとめて結果部分に加筆すること。

2.1.8 研究全体において、ツールの開発がメインなので、それぞれが臨床的にどう使えるかの記述を整理して考察部分に加筆すること。

2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1 従来の尺度と比較した場合、今回の尺度は何を測定しており、どのように有用かという点について具体的に考察を加え、第3章に加筆した。

2.2.2 学生と社会人の間には、体験の回避の程度に著しく影響を与えるような環境的差

- 異はないと想定したことを、第3章に加筆した。
- 2.2.3 Event-basedとTime-basedの2種類の回答の質の違いについて、回答データに基づいた解析と考察を新たに行い、第4章に加筆した。
 - 2.2.4 体験の回避を cEMA で測定する方法と質問紙を用いて測定する方法の違いについて、理論的な面と研究結果に基づく面から考察し、第6章に加筆した。
 - 2.2.5 測定に従事することが治療的な効果を持つ可能性があることによる測定の正確さを欠くという課題とその改善策の必要性について考察し、第5章に加筆した。
 - 2.2.6 経過を示すグラフで累積数を使う有用性と、ターゲット行動と体験の回避の指標のグラフ上での望ましい変化パターンの説明を、第5章に加筆した。
 - 2.2.7 研究5の参加者のcEMAへの取り組みの感想と回答状況の確認結果をまとめ、その結果の考察とともに、第5章に加筆した。
 - 2.2.8 質問紙とcEMAを用いた随伴性に基づく測定法の差異および臨床応用の展望について、総合考察において新たに考察を加え、第6章に加筆した。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本研究は、体験の回避に関わる行動的プロセスを測定するツールの作成と、日常生活下における測定法の応用可能性について検討することを目的として明確に設定している。体験の回避は種々の心理行動的問題の維持要因として注目されており、その測定方法が拡充されることは研究・支援のどちらにも寄与するという点から、臨床心理学研究として妥当なものであると判断できる。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本研究においては、体験の回避に関する2つの測定尺度を作成し、cEMAを用いた体験の回避の測定法を2つの研究によって改良した上で、行動習慣変容の意図のある大学生4名と広場恐怖症患者2名を対象にして体験の回避の測定を実施している。したがって、本研究の方法論は明確かつ妥当であると判断できる。なお、本博士学位論文の内容を構成する研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認（承認番号：2013-280；2014-121；2015-195；2015-HN016；2016-036；2017-HN009）を得ている。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本研究の成果は、質問紙に加えて cEMA を用いることで、体験の回避が持つ負の強化の随伴性で維持される側面と体験の回避の意図に基づくルール支配行動として捉えられる側面を、日常生活下で測定できるという明確な結果としてまとめられている。これらの知見は、先行研究と照らし合わせても、行動分析学に基づく行動の維持要因に関する実証的知見として妥当であると判断できる。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
 - 3.4.1 先行研究において、体験の回避を測定するために用いられてきた AAQ-II は、より広い行動的プロセスを含めて測定しているとされてきた。この点に関して、本研究では、対象を体験の回避に絞って、回避を促進するルールの確信度およびそれに従った行動の程度と、体験の回避と同次元上で逆の極に位置するアクセプタンスのそれぞれが測定可能な質問紙を開発したという点で新規性を有する。
 - 3.4.2 先行研究においては、日常生活下で体験の回避を測定しようとする場合、特定の

場面で一定の形態を持った行動に着目してその頻度を測るのが一般的であった。一方、本研究においては、cEMA を用いることで、場面や形態に関わらず体験の回避そのもの（行動の機能）を測定可能にした点で独創性を有すると考えられる。

3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1 本研究において、新たな質問紙と cEMA を含む体験の回避の測定法が拡充されたことで、臨床場面にまで適用可能なアセスメント法の選択肢が広がった。これは、効果的な臨床心理学的支援というゴールに寄与するという点において有意義であると考えられる。

3.5.2 cEMA を用いた測定方法の枠組みを提案したことで、従来は困難であった体験の回避そのものを測定できる可能性が広がった。行動の形態に関わらず、測定時の行動を体験の回避という同一の機能に基づいて捉えることが可能になることは、臨床行動分析に基づく研究・支援両面の発展という面からも意義が大きい。

3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1 人間科学においては、人間行動の様々な測定方法を確立することは、実証的研究を進める上で必須条件になる。今回、精神疾患や心身症などを含む多くの心理行動的問題の維持要因である体験の回避に対する測定法を拡充できたことは、実証的研究の進展に役立つという点において人間科学の発展に寄与するものである。

3.6.2 本研究において開発を進めた体験の回避の cEMA による測定法は、今後、情報科学分野で発展の著しいビッグデータ解析や人口知能の活用等と結びついて、日常生活下での人間行動の時系列データを測定・解析・活用する方法として大きく発展する可能性がある。人間行動の測定技術に関わる学際的研究を推進する一つの方向性を指し示したという点で、本研究は人間科学に貢献するものである。

4 本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

- ・ 嶋 大樹, 川井智理, 柳原茉美佳, 大内祐子, 齋藤順一, 岩田彩香, 本田 暉, 熊野宏昭：2017 Acceptance Process Questionnaireの作成および信頼性と妥当性の検討. 行動療法研究, 43巻1号, 1-14頁.
- ・ 嶋 大樹, 本田 暉, 熊野宏昭：2017 日常生活下における随伴性に基づく体験の回避の測定方法論の検討—Computerized Ecological Momentary Assessment (cEMA) の応用—. 早稲田大学人間科学研究, 30巻2号, 193-203頁.
- ・ 嶋 大樹, 富田 望, 高橋まどか, 熊野宏昭：印刷中 Change Agenda Questionnaireの作成と信頼性および妥当性の検討. 行動医学研究, 23巻2号.

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以 上